

# 20代で文学賞を受賞した作家(芥川賞を中心に)

The Best Reading “Prize-Winning Novelist of 20’s (especially Akutagawa Award)”

➤ れを見ている皆さんの中には、今、20代に足を踏み入れたところか、あるいは、20代を目前に控えた方が多いかと思います。子どもの頃思い描いていた「20代の自分」はどんなだったか、思い出せますか？あの頃に持て余していた途方も無い時間を嘆くこともあるでしょうが、きっとあの頃とはまた異なった感情で「今」そして「自分」を大切にできているのではないのでしょうか。

「若さ」というのは其れだけで武器にもなりますが、「弱さ」とも背中合わせです。また、同じように若くとも、10代と違って20代では何かと「大人」としての責任を問われる年代であります。「若いから」許されることもあるし、逆に「若さゆえ」冒してしまう過ちもあるでしょう。

「大人」と「子ども」の境界線にある若い「感性」、即ち、大人には無い視点、子どもには無い視点を其々有しつつ、混濁のない透明な、しかしながら全てを反射する白と、全てを吸収する黒をも併せ持った感覚で物事を捉えます。時に反抗的に、時に純粋に、悦び、楽しみ、哀しみ、傷付き、未来への不安を抱えつつ歩いてゆかねばなりません。

こうしたさまざまな感情を昇華する手段として「文学」を選び、認められるに至った人々を、今回はテーマとしようと考えました。その中でも特に、新人作家の一つの大きな登竜門となる芥川賞にフィーチャーしています。

行間から滲み出る「若さ」と、作家としての才能を開花させたプロの技巧を、この展示を通して感じていただけたら幸いです。



平成 19年 8月 -9月期展示  
学習院大学図書館 1F 展示

# ? 文学賞あれこれ?

## ● 文学賞の種類

世の中にはたくさんの文学賞がある。発表されればニュースになるような賞から、誰も知らないような賞まで、本当に様々である。

試しに、『最新 文学賞事典 89/93』（請求記号：大学図・参考 910.3/55c）を開いてみる。文学・小説というジャンルでは、実に 176 もの文学賞がある。有名作家の名前が付いた文学賞に限ってみても 30 を越える賞があり、月刊の所謂文芸雑誌の名前を冠しているものもかなり多い。

因みに、そのほか記録文学・評論・随筆、詩、単価、俳句、児童文学等々を併せると、勿論大小さまざまではあるが、423 もの文学賞が存在する。

## ● もっとも有名な文学賞

その中で、誰もが知っていると言っても過言ではない賞と言えば、やはり芥川龍之介(あくたがわ・りゅうのすけ)賞、そして、その姉妹賞である直木三十五(なおき・さんじゅうご)賞であるだろう。両賞は、テレビや新聞・雑誌などのマスメディアでも多く取り上げられている。芥川賞は、その性格上比較的若人が獲得するが、近年は最年少記録の更新もあり、何かと賑わっている。メディアの扱いだと、直木賞は、若干オマケ扱いのような感が漂うが、余りにも著名な芥川氏という個人に対して、直木氏は些か知名度が低いためではないだろうか。もちろん、両氏とも其の時代を席卷し、かつ今でも語り継がれる素晴らしい作家である。

両賞を創設したのは、作家であり、文藝春秋社の創設者でもある菊池寛(きくち・かん)氏である。菊池氏は、“故芥川龍之介、直木三十五両氏の名を記念する爲茲(ここ)に「芥川龍之介賞」並びに「直木三十五賞」を制定し、文運隆盛の一助に資することとした”(『芥川・直木賞宣言』『文芸春秋』13(1) 1935.1 p.110-113) とし、現在まで 80 年以上も続くもっとも有名な文学賞の創設者として、これらの賞を支えてきた。



## ● 芥川龍之介賞・直木三十五賞とは？

芥川龍之介賞（通称「芥川賞」）は、当該期間（上半期：12月1日～5月31日まで、下半期：6月1日～11月30日まで）中、各新聞・雑誌に掲載された、無名・新進作家が公表した短編の「純文学」作品を対象としている（受賞作は、『文藝春秋』に掲載される）。

直木三十五賞（通称「直木賞」）は、芥川賞と同様の期間中、各新聞・雑誌に掲載された、無名・新進・中堅作家が公表した短編および長編の「大衆文芸」作品を対象としている（受賞作は、『オール讀物』に掲載される）。（「文芸春秋 | 各賞紹介」 <http://www.bunshun.co.jp/award/index.htm> を参照）

さて、何の断りも無く使用したが、芥川・直木両賞が対象としている「純文学」と「大衆文芸」とは一体何なのか。紙面の都合上、ここでは簡単に書くが、興味があったらさまざまな資料があるので読んでみて欲しい。純文学とは、“作者の芸術的感興に基づく純粋な態度で書かれた小説（世界大百科事典）”で、大衆文芸とは、“マス・メディアの成熟を基礎として成立した新興文学で、大量生産、大量伝達、大量消費（同）”を前提とした所謂エンターテイメントである。

### ▲コラム？▼ 純文学と大衆文学

上記の定義を見てもらえば分かる通り、結局「純文学」や「大衆文芸」にあたるものがどんな小説なのか、まったく検討がつかない。定義が曖昧過ぎて、と言うより、この二項対立自体が既に時代遅れとなっているのかもしれない。横光利一（よこみつ・りいち）氏は、芥川・直木賞創設と同時期に、「純文学にして通俗小説（大衆文芸と同義）」である「純粋小説」を目指すべきとしたが、文芸評論家の結秀実（すが・ひでみ）氏は、第一回芥川賞を受賞した石川達三（いしかわ・たつぞう）『蒼氓』が既に「純粋小説」的であり、“その後も「純粋小説」的な作品が数多く受賞している”ことを指摘し、“「純文学」という概念は、少なくとも昭和十年以来、石川達三をとりあえずの象徴的な担い手として、事実としてはおおむね「純粋小説」のことだったと言える”（結秀実“純文学”を必要としているのは誰か”『群像』48巻12号 p.231）と書いている。

「純文学と大衆文芸」について、『文学界』47巻10号～48巻1号まで、鈴木貞美（すずき・さだみ）氏が非常に良くまとめた連載を書いているのでそれを紹介する（展示中）。大衆文芸が本当に純文学の対立概念なのか、その垣根を越えた「純粋小説」とは一体何か、大衆文芸の興りとは、自然主義、プロレタリア文学等々との関係は、・・・そんな疑問に答えてくれる連載になっている。

## ● 芥川賞歴代受賞者（20代）リスト（展示中）

受賞回	受賞者名	作品名	年齢	請求記号
136回	青山 七恵	ひとり日和	23歳	大学図 Best/2007 女大図 Best-jo/2007/45
133回	中村 文則	土の中の子供	27歳	大学図 913.7/1267
130回	金原ひとみ	蛇にピアス	20歳	大学図 913.7/1304
120回	平野啓一郎	日蝕	23歳	大学図 913.7/1221/18*
104回	小川 洋子	妊娠カレンダー	28歳	大学図 913.7/1221/15*
75回	村上 龍	限りなく透明に近いブルー	24歳	大学図 913.7/1221/11*
56回	丸山 健二	夏の流れ	23歳	大学図 913.7/1221/7*
39回	大江健三郎	飼育	23歳	大学図 913.7/1221/5*
34回	石原慎太郎	太陽の季節	23歳	大学図 913.7/1221/5*

\*は『芥川賞全集』の請求記号

## ● 芥川賞関連オススメ書籍（展示中）

■ 純文学のエッセンスだけでも感じてみたい方に

「芥川賞90人のレトリック」	彦素勉編
++作品紹介	[請求記号：大学図・開架 910.26/472]

芥川賞受賞作家90人の作品の、特有の文章表現などを抜き出したものを編集したもの。非常に特異な資料。

川端康成氏はその新文章読本の中で、「美しい文章はその作家の芸術的生命が高揚している時、その頂点をみるようである。(略) 至芸の老年の文章に劣らず、処女作の稚拙は美しくとも考えられる。処女作の文章は可能性を持つからであろうか。こみあげる何かを、切なくうたいあげているからであろうか」と語っているが、ここにいう「処女作」を「芥川賞作品」に置き換え、新人の才能と個性が綺羅星のように一堂に会する、そんな本を出してみたい、というのが本書出版の動機であった。（「はじめに」より）

■ 芥川賞・直木賞をもっと詳しく知りたい!という方に

「芥川賞事典」、「直木賞事典」(国文学 解釈と鑑賞 42 巻 1号, 6号)

[請求記号: 大学図・書庫 901.5/5  
: 女大図・参考 910.33/20.21]

++作品紹介

芥川賞と直木賞についての、発刊当時(1977年)までの事典。受賞作の概要が見開き1ページに掲載されていたり(作品事典)、賞の歴史などについてまとまっていたり、見応えのある事典である。

「回想の芥川賞・直木賞」

永井龍雄著

[請求記号: 大学図・書庫 910.26/123]

++作品紹介

外から見た両賞の歴史は、「芥川賞事典」「直木賞辞典」(至文堂発行)その他かなり詳細なものが何種類か刊行されているが、経営に当たっていた内輪の者の眼で賞の周辺を語れというのが、編集部の意向である。なるほど私は、両賞創設以来、戦中の昭和十八年上半期まで事務の一切を処理してきた。「第一章」より

「芥川賞の研究」

永井龍雄、佐佐木茂索 ほか著

[請求記号: 女大図書・開架 910.26/37]

++作品紹介

八十回を越す歴史の中で、「芥川賞」が文壇に幾多の才能を輩出し、その折り折りにジャーナリスティックな話題を投げかけてきたことは周知の事実である。(中略)そこで、われわれは芥川賞に関する観念的な議論を排し、いままで発表された銚衡委員、受賞者、評論家、ジャーナリスト等の現行、発言を忠実に読むことによって、芥川賞の今日的意義を考えてみようと思った。それが本書の刊行意図である。「あとがき」より

■ 文学大好き!私も芥川賞作家になりたい・・・という方に

「小説家になる!2 芥川賞・直木賞だって狙える12講」 中条省平著

[請求記号: 大学図・開架 901.3/43 7/2]

++作品紹介

この自由さと多様さをコントロールする言葉の技術が必要とされるのです。小説の技術は一種のゲームの規制だと考えていかもしれません。このゲームの規則は体系化されていないので、実際に小説を読む経験から会得するほかないのですが、会得にもコツがあります。本書は其の小説のコツをさまざまな角度から浮き彫りにしようとするささやかな試みです。(「はじめに」より)

● Special Feature #1

青山七恵

フリーターの若い女性と、遠縁の老女との同居生活を描く『ひとり日和』で、第136回(平成18年度下半期)の芥川賞受賞。若干23歳11ヶ月の受賞で、世間を賑わせた。23歳での受賞は、最年少かつW受賞でこれまた世間を驚かせた19歳綿矢りさ(わたや・りさ)と20歳金原ひとみ(かなはら・ひとみ)に次ぐ若さで、23歳1ヶ月の丸山健二(まるやま・けんじ)、同3ヶ月の石原慎太郎(いしはら・しんたろう)、同5ヶ月の大江健三郎(おおえ・けんざぶろう)、同6ヶ月の平野啓一郎(ひらの・けいいちろう)らと同年齢(全体では7番目)だそう。

下記に抜粋した選評にもある通り、選考委員の評価も高く、「若さ(=即ち、話題性)」だけではなく、実力も兼ね備えていると言えるのではないだろうか。これからのご活躍にも期待したいところである。(余談ではあるが、彼女は筑波大学図書館情報学群(旧・図書館情報大学)卒業で、筆者の一年後輩に当たる。直接会ったことはなかったが、同じキャンパスで勉強していたと思うと感慨深い。)

● 選評

村上龍(むらかみ・りゅう)氏

わたしは青山七恵さんの『ひとり日和』を推した。読んでいる途中から候補作であることを忘れ、小説の世界に入ってしまった。<中略>作者の観察力というか視線の正確さに心地よい驚きを感じるようになった。

高樹のぶ子(たかぎ・のぶこ)氏

観念から出てきた作品ではなく、作者は日常の中に良質な受感装置を広げ、探るべきものを探って自然体で物語をつむいだ、かに見えるのは、実はかなり実力を証明している。

河野多恵子(こうの・たえこ)氏

作者は極く若い人だが、若さの匂いや若さにまかせて書いている様子は全くない。私はこの人に本物の早熟を感じた。

(『文芸春秋』85(4)2007.3.p.395-363より抜粋)

## ● Special Feature #2

大学在学中に書き上げ、『新潮』編集部に18枚もの手紙を綴り、結果『新潮』に採録されるに至ったという『日蝕』で、第120回芥川賞を受賞した実力派作家。当時23歳での最年少受賞（月数では他三人に負ける）も去ることながら、その博学ぶりと史料調査に半年（執筆にさらに半年）かけたと言われる精緻な文章から、「三島由紀夫(みしま・ゆきお)の再来」とまで言われ注目を集めた。

平野氏本人も、三島氏の“気質とシンパシーを感じますし、ある意味では近いものを感じます”とインタビューに答えている。もっとも、石原慎太郎氏は、“三島氏がこの作者と同じ年齢で書いた「仮面の告白」の冒頭の数行からしての、あの強烈な官能的予感はこの作品が決して備えぬものでしかない”と述べている。古井由吉(ふるい・よしきち)氏も同じことを言っているが、“三島由紀夫の初期に見られる甘美の魅惑はこの「日蝕」には乏しい。むしろ、抑えられている。かわりに、文学的な感覚にはまかせぬ構築がある”と、別の観点で称えている。



『日蝕』は、芥川賞の選考委員までもが、辞書を片手に読まなければ読了できなかったという程難解であるため、非常にペダンティック（所謂「学のひけらかし」）だと批判されはしたが、平野氏本人は、其れさえも“書こうとするモチーフのためにもっともふさわしい文体を”が基本姿勢だから、と言い切ってしまう。先の石原氏のようにそれを「銜い」ととるか、あるいは河野多恵子氏のように（より感性のレベルでの）“理由なき選択”をとるか、賛否は両論ではあったのだが、“作者の志の高さを見た”（河野氏）、あるいは、“将来に大きな楽しみをかかえた強くて豊かな膂力（りょくりょく）”のように、将来に期するものが高く、“幾つかの不満はありながらも芥川賞に推さざるを得なかった”（宮元輝(みやもと・てる)氏）といわれている。

（『文藝春秋』77(3) 1999.3 p. 355~440「選評」及び「平野啓一郎氏に聞く」より抜粋）。

# 平野啓一郎

## ／ その他の展示資料

20代で直木賞を受賞した作家（一部）と、平野啓一郎の Special Feature 以外の作品です。

	作品名	作者	請求記号
	ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー	山田詠美	大学図・開架 913.7/770 ※この作品で、直木賞受賞（28歳）
	むかしのはなし	三浦しをん	女大図・カレント Best-jo/2006 ※この作品で、直木賞受賞（29歳）
	一月物語（いちげつものがたり）	平野啓一郎	大学図・開架 Shincho/ひ 18/2 女大図・開架 SHINCHO/ひ 18/2
葬送	第一部 上	平野啓一郎	大学図・開架 Shincho/ひ 18/3 女大図・開架 SHINCHO/ひ 18/3
	第一部 下	平野啓一郎	大学図・開架 Shincho/ひ 18/4 女大図・開架 SHINCHO/ひ 18/4
	第二部 上	平野啓一郎	大学図・開架 Shincho/ひ 18/5 女大図・開架 SHINCHO/ひ 18/5
	第二部 下	平野啓一郎	大学図・開架 Shincho/ひ 18/6 女大図・開架 SHINCHO/ひ 18/6

## ● 終わりに

もっともポピュラーで、歴史もある文学賞である芥川賞と直木賞。今回の展示では、特に「芥川賞」に注目をして、その歴史や逸話、裏話にまで触れた資料などを紹介しました。さらに、20代で受賞した作家の紹介、受賞作品の紹介にも大きくページを割きました。

もちろん、今回ご紹介したものは、芥川賞を扱った資料の一部ではありません。学習院では所蔵していない資料でも、協定を結んでいる大学だったら見られるかもしれません。

また、最初にご紹介したように、一口に「文学賞」と言っても、何百を越えるような賞があります。それぞれ特徴の異なる賞ですので、芥川・直木賞だけではなく、『最新 文学賞事典 89/93』を見てどんな賞があるのか見てみるのも面白いかもしれません。そして、「文学」に対する興味を拡げてみてはいかがでしょうか？